

サイエンスライティング手法の整理とその適用状況

松村 恭兵

東日本大震災の際、様々な報道がなされた。そして、どの情報を信じるかの判断は個人に委ねられていたことが指摘された。こうしたことを受け、科学リテラシーの重要性が指摘された。本研究では、科学リテラシーを高める方法の1つとして、サイエンスライティングに着目した。科学についてわかりやすい文章で書かれた図書が増えることで、読者の科学リテラシーを高める一助となり得ると考えた。本研究は、サイエンスライティング手法を整理し、サイエンスライティングに取り組みやすくなることを目的とした。

調査としては、国立国会図書館の蔵書のうち、日本十進分類表（以下、NDC）で407（研究法、指導法、科学教育）に分類された図書1859冊から、サイエンスライティングに関する図書13冊を選別した。そして、サイエンスライティング手法を抽出、分類し、階層構造で表した。次に、大学教員とサイエンスライターが書いた一般向け科学図書各4冊から、ページを無作為抽出し、用いられているサイエンスライティング手法を調査した。

その結果、サイエンスライティング手法は338件抽出され、「考え方」「レイアウト・デザイン」「文章」「文」「説明」「表現」「言葉」の7つに分類された。調査できた手法は57件で、大学教員は50件、計726回用いており、サイエンスライターは48件、計894回用いていた。手法の使用回数で t 検定を行った結果、大学教員は、数式を用いたり、ある程度専門的な内容に踏み込んだりして説明を行うという手法を用いていることがわかった。一方、サイエンスライターは、一文を短くするという手法や、比喻や詩情的な表現を用いてイメージに訴えるという手法を用いていることがわかった。今回調査を行った大学教員とサイエンスライターとは、用いている手法に違いがあることがわかった。本研究は、サイエンスライターは大学教員が、大学教員はサイエンスライターが用いている手法を知り、より積極的にサイエンスライティングに取り組む一助になると考えられる。

NDCで407に分類された図書の調査では、サイエンスライティング手法をすべて抽出したとは言い難いため、今後はNDCで407以外に分類された図書からも手法を抽出したい。また、ページ単位では調査できない手法があったため、図書1冊を通した調査も行いたい。

（指導教員 三波千穂美）